

つたが、編成は次の通りである。

第四航空情報連隊（総員約八二五名）

連隊本部（本部・経理部・衛生部約二三名）

第一、第二、第三中隊（三個小隊、一個小隊、四個分隊約二〇〇名）

警戒第一中隊（約一六〇名）、警戒第二中隊（ホーラ

ンジャーに建設予定中、昭和十九年四月二十二日敵

上陸のため中止、兵器、要員は輸送中行方不明（先着者一部、約十名）材料廠（約十名）

第一中隊（昭和十七年十一月二十七日編成、主要兵器

対空二号無線機、戦闘参加地域―ニューブリテン島、

東部ニューギニア、西部ニューギニア）

第二中隊（編成・兵器第一中隊に同じ、戦闘参加地域

―ソロモン群島、東部ニューギニア、西部ニューギニア）

第三中隊（編成十八年四月二十七日、主要兵器第二中

隊に同じ、戦闘参加地域―ニューブリテン島、東部

ニューギニア、西部ニューギニア）

警戒第一中隊（編成十八年三月五日、超短波警戒機（固

定移動）戦闘参加地域―ウエワーク、アンゴラム）

終戦時、ラバウル・ウエワーク（ムッシュュ島）・サル

ミの三地区に集結、

(一) ラバウル地区は昭和二十一年四月、名古屋上陸、復員

(二) ウエワーク地区主力は一月二十五日、浦賀上

陸、復員

(三) サルミ地区は六月、名古屋に上陸、復員。

西部ニューギニア 飢餓との闘い

奈良県 大森捨夫

―大森さんは郡山生まれですか、何年徴集ですか。

私は大正十一年十一月六日に、この郡山市で生れ、

昭和十七年徴集で第二乙、昭和十八年八月召集され、

兵庫県加古川の防空隊に入隊したのです。一期三ヵ月

間、高射砲の教育を受け、引き続き臨時召集され明石

の川崎航空の警備について、陣地を作った。自分は第

一中隊配属、一個中隊には高射砲は六門で砲手や観測などであった。一門づつ掩体で囲ってあり、射撃は中隊長の命令で射つのです。

昭和十九年の二月頃だと思いが野戦へ転属することになり、東京の世田谷野砲（近衛第二師団の官部隊）

で訓練を受けてから野戦へ行くことになったのです。

何処へ行くのか判らないが、本隊はスマトラにある。

私は横浜から出港、二万二三千トンの貨物船でした。

二十日ぐらい航行したが、途中空襲や潜水艦が出た

かで、行ったり戻ったり、父島あたりで待機しました。

船団は四隻、護衛艦がついていて無事にパラオ群島

へ着いた。パラオの港の海底に沈没した船が見えた。

海は澄んで綺麗だが、岸壁へはなかなか着けなかった。

何とか私たちは上陸して、その船には内地に帰る邦人

を乗せて出航したが、途中やられたらしく、一部の人

が助けられて戻って来た。

我々はパラオ本島へ移動し、その後出港となったが、

何処へ行くか判らない。船は巡洋艦「青葉」でソロン

へ着いたのだが、途中では敵の偵察機が飛んで来たの

で、艦砲射撃をしてことなきを得た。

ソロン島は西部ニューギニアの西端にある島で、そこには前に上陸した兵隊がいたが、海軍が多かった。

陸軍は関東軍のバリバリの二三年兵の現役だった。

最初は二個中隊ぐらいで、私たち第一中隊はソロン

島、本隊はニューギニアのマノクワリあたりだったよ

うでした。高射砲は各中隊毎に陣地構築したのだが、

先に言ったように海軍基地なのです。その後、舟艇で

サラワ島の飛行場警備に行きました。

昭和十九年も半ば、特にニューギニアは激戦が続

いて、東から西へと敵は進んで来たから、西部二

ユーギニアやハルマヘラへの敵の空襲は大変だっ

たでしょう。

そうですね、当時、銃爆撃は多く、昼間は作業が出来

なかった。飛行場もメチャクチャになり、初めは海軍

機があつたが、後になったら飛行機は皆潰されてしま

った。我々は高射砲隊だが、飛行場修理のためには台

湾の勤労団がいて、爆撃の跡の穴を埋めていた。しか

し、勤労隊員は、アミーバー赤痢やマラリアなどの病

気になって作業が出来ない（第四二飛行場中隊）。我々兵隊は陣地構築をやっていた。

その時は、煙が上がれば空襲されるので昼間は炊事も出来なかった。そのうちに飛行機も無くなり、飛行場も使用不能となり、続いていた空襲は少なくなった。我々兵隊もだんだん病気になる、陣地を作るのが精一杯だった。

島に着いた当時は食糧もあつたが、だんだんと無くなり、その内、農作業で芋を作り、米飯は一日一回、飯盒の蓋一杯を分隊十三人で食べるだけ。畑といつても、山のジャングルとジャングルの間の木の無い所を開墾した。

上陸当時盛んだった爆撃も、敵はだんだん沖縄の方へ行つて、もう空襲されなくなった。

一弾が来なくなつたら、今度は兵糧攻めですか、小さな島だから特に大変ですね。補給もないのだから。

そうですね、これからは飢餓との戦いになった。一個中隊一二八名のうち、三分の一以下しか残らなくなつ

た。戦闘はなくとも病氣と栄養失調、とにかく食物がない。病氣や、栄養失調になると、動けないから自活出来ない。自分は自分で生きなければならぬから、雑草も採ることも出来ず死んでしまった。

サワラ島の大きさは聞いていないが、食糧も無ければ野戦病院もない、軍医もない。我々は独立中隊だから衛生兵が一人いるだけだ。隊長は中尉で、二個小隊、三個分隊が一個小隊。その他は中隊指揮班と弾薬の輸送班。砲弾は二個で三〇キロ、四発一梱包のだと六〇キロ。最初は運搬したが、最後は体力もなくなり弾は射てず残ってしまった。

食糧は農作だけでなく、漁労班や狩猟班も作った。山には野豚が多く、小銃で射つのだが、取つて来た時はいいけれど暑い所なので一、二日しか保たない。オームや鳥も射つて食べていた。野菜は野草だった。主食の芋だが、植えてから指ぐらいの太さにするのに三十日はかかる。植える、食べるで、蔓も葉も食べるが、とにかく腹が空くので何も出来ない、だんだん動くことも出来なくなる。

―終戦は何時頃どのように知ったのですか。

艦砲射撃は無くなり、空襲も無い。そのうち飛行機がピラを撒いて来た。「日本は降伏した」というのが我々は信用しなかった。我々は自分の隊のことだけで、他部隊や海軍がどうなっているのか判らない。ただただ、食物を作ること、探すことだけ、時計も無い、マツチも無い。油は兵器の手入れ用のもので何処から手に入れたのか、今思い出せない。

ピラが撒かれたのは何時だったか判らない。最初は今日は何月何日と判ったが、他島との連絡や、本部へ命令受領に行ったから判ったのだろうが、だんだんと判らなくなる。本部は何という所か不明、ジャングルを分けて行くのだが磁石も無いから、西も東も判らぬ。着る物も無い、始めは戦友が死ねば、その服を着ていたが。

終戦は何時判ったかという、本部からの命令で確認出来たわけです。

その後、私は病気になる、他の病人とセレベス島のメナドから自動車で奥地へ行き入院した。治療には

薬も全く無い。栄養失調だから食べることだけ。そこで幾分回復したが、食べ過ぎて胃拡張となる。食べたこと、食べることが病氣。

病院に入っても、抜け出して住民と物々交換して食物を食べた。そこで大分良くなり、米国の輸送船でメナドから十五日間乗り、田辺港に着いた。

戦地へ行っている間は給料無しで、田辺で何ぼか貰ったが帰るまでに無くなった。

話がまた元に戻りますが、島に上陸した当時は原住民がいた。土人は甘味品やマツチ、紙でも不思議そうに見ていた。木の皮の褌一本で裸。タバコは木の葉で巻いて吸っていた。物をやれば労働もしてくれたり、椰子の実など持って来てくれた。もつとも給料貰って、金はあっても使えない、物々交換だった。

戦争が酷しくなったら土人は山奥へ入って出て来なくなつたが、敵対行為はしなかった。私も栄養失調で倒れたが誰も助けてはくれない。自分一人でやらねばならない。

終戦後、体がむくんでいたが、ある時から不思議に

も夜何回も小便に行く、治療をしないのにむくみが引いていった。それで自分で歩けるようになった。奇跡的に助かった。それからメナドで回復したが、そこには硫黄温泉があり、南方特有の疥癬（蚊に喰われると体中疥癬になる）が治ってしまった。

赤痢になっても、ドラム缶の水を飲んでも、免疫になつたか、治療しないのに治つた。抵抗力ある者だけが生き残り、他の者は死んでしまった。私は当時まだ若かつたし、入隊前、家で農業やつていて、精神的にも困苦欠乏に耐えられたから生きて帰れたのでしよう。

飢餓と病気は我々だけでなく、ニューギニア全部にいえるでしよう。マノクワリに敵が上陸した後、日本兵は西へ西へと移動して行つた。その部隊も初めは食糧があつたが、後は何も無く、靴の革まで食べたという。帰国を前にして船の上で随分の者が病氣や栄養失調、また精神的にまいって死んでいった。

私は不思議にも何とか回復して退院してから、連合軍の第四二収容所に入って船待ちしていたので、隊長も戦友もバラバラとなり、分隊では二人残つただけで

他は死んでしまつたようだ。帰ってからマラリアが出たが薬が無く、四〇度ぐらいの高熱、ふるえを我慢していたが病院で回復出来て良かった。今は幸せにも達者で農業をやる事が出来ている。

↑ 飢餓と空腹とは全然違う、アフリカや世界各地の子供たちの姿をTVで見ると当時のことを想い出し胸が迫るのを感じるでしよう。飢餓を体験し、飢餓を克服して帰ることが出来た者の実感でしうね。